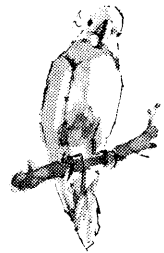


# 子どもと動物のふれあい



遠藤悟朗

幼児教育の世界では、動物を教材として取りあげている場合が多い。そのみならず子どもの絵本などでは、動物が現れない場合の方が少ないのではないだろうか。そのような動物の中には、人の物語を動物の主人公に肩代りさせただけのこともある。いずれにせよ子どもたちにとって、動物はきわめて身近な存在といえよう。

しかし、生きている本物の動物に接する機会が乏しくなるのと反比例して、このような活動で我慢しなければならぬことはまことに残念なことのように思われる。

動物と同じ地上に立って、子どもなりに、そして時宜を得た活動、場合によっては子どもにとってつぎの悪い状態に立つかも

しれない。しかしそれにうち勝ってゆく、人間としてもっとも基本的な、そして素朴な経験は、動物を除いては他に得られないといっても過言ではなからう。思うようにならないからといって、中には動物を好まない子どもも現れよう。瞬間的な情動によって支配される傾向にあるわれわれにとって、科学的に物事を処理する、また処理するその過程の中で相手を知る努力がなされなければならぬ結果にもなりかねない。このような前向きな姿勢で物事におつかってゆくことは、子どもたちにとって欠かせない内容であって、実物による直接経験の意義の、大半を占めることからであるといえよう。

子どもたちが直接動物と対面した場合、見るだけではすませられない場合が多い。動物を追いかけたり、さわったり、つかまえてみたくなるのは当然で、その時どきに、幼児なりの経験を積み重ねているのである。何かをしかした時の成就感を得るためか、すること自体を満喫しているのか、いろいろな形で行動するのを見かける。

しかし動物に直面した子どもが直ちにそのような行動をするわけではなく、一時はそれこそまばたきもしないでじっと見る状態から始まるよううかがわれる。柵・檻かきがあっても一メートル以上も離れたところでじっと見つめ、次第にいろいろな活動に移る。

子どもと動物の境界を設けない、いわゆる放しがいの場合で接触をもたせると、子どもの状態はより顕著にうかがうことが可能となる。多くの子どもたちは、その場所に入る前にそれなりに動物を調べているのではないかと考えられる。無鉄砲に行動する者もないではないが、年齢的あるいは過去の経験、子どものもっている知識（先入感の場合もあろう）などによって左右されるものではあるまいか。

その子どもの状態にふさわしく、子どもと動物の橋渡しをしなると、とくに事実にはぐわぬ誤まった先入感などによって行動した子どもは、子ども自身予期しなかった動物の行動に出られて

しまい、驚きのあまりふり出しにもどらざるを得ないようなことにもなりかねない。従来ならば放置しておき、七転び八起き式に子どもを突っぱねておいてもことがたりたかもしれない。動物に直接接する機会が乏しく、さらに情報過多の現今では、それなりの橋渡しが必要であればかえって悪い結果をもたらすものといえよう。

さきに記したように、自分から動物に働きかけられる子どもであるならば、解決の方法はそれほどむずかしいとは思われない。

一方働きかけようとしなければかりか、柵かき・檻かきごしかきであつても動物舎の前を通り過ぐす子どももいる。同じ地上で、直接動物にまみえる場合だと恐れをいだく子どももいる。過去、動物から望ましくない経験を得た者や、アレルギー体質（一〇〇万人に一人ぐらいの割合）など体質的に問題のある子どもは別として、何でもないはずの者にもかなりいる。

盲児が初めて動物に接する際の不安を現わす言葉に、「これかみつかない……。」というのをしばしば聞く。犬による事故の多い昨今のことなのでやむをえないかもしれないが、正常な幼児からでもこのような言葉をよく聞く。ヤギなどの話をする場合、上顎の切歯がないので「ヤギはかみつきたくてもかめない」と説明している。聞いて理解はするものの、からだで理解するにはかなりの時間を必要とする。子どもにしてみれば不安にまさる喜びに

置き変えなければならぬからであるといえる。

しかし動物は、幼児の眼を輝かさせるにたる「驚き」に満ちているのでありがたい。一時間ほどの間に、初めとはがらっと違った晴々とした子どもの姿を、私は毎日のように見せてもらっている。

ところが、何を見ても一向に表情を変えない子どももたまにはある。心の中には反応が起こっていても顔に表わさないのかもしれない。中には全く心が動かないような子どももいるようである。感受性が最も強いはずの幼児期をこのように過ごして成育してゆくのであるとするならばぞら恐ろしいかぎりである。

極端に動物を忌避したり、あるいは望ましくない結果を経験したことによって、普通の幼児のように赤裸々な形で動物にふれあえぬ子どもは、時間をかければ普通児と同じ、否、場合によってはそれ以上することもできよう。病気や体質の問題は処置可能な範囲で治癒させることもできよう。好ましくない原因のものは、子どもをとりまくおとなが作っている場合もあるようだ。原因除去についてはおとなたち自身が反省しなければならぬ点も多い。

動物は一定のリズムをもって、与えられた環境の中で生活している。それをじっと見守っていると、断片的かもしれないが特性らしいものを折にふれ発見させられるものである。

子どもたちが喜ぶ動物シヨウは、元来そのような特性を巧みにとらえ、助長されたものである。人間ならばこうするはずのことを、チンパンジーはチンパンジーなりの運動能力を用いてこなしてくる。人とは異なる意外性も手伝って、おとなも心から笑みをたたえて見入ることのできる場合が多い。

サルを立ち歩きさせる場合、好む食べ物や、大切にする子ネコなどを持たせることから始めたことがある。教える側が意図する姿勢、動作などを行なわせるキツカケを先ずとらせるための方法の一つといえよう。そして次第にならして、上手に、そして人の命令で行なえるように変えてゆくわけである。キツカケ作りも、状況如何では、人が手本を示す場合もある。しかし、綱渡りや一輪車に乗れる人はそうざらにいないものではない。動物シヨウの多くは、習性をより高度に、そして人に喜ばれる扱いに変形したものに過ぎないといえよう。要はその動物が何ができるか、それを見いだすことから始まる。

シヨウに該当するかどうか疑問ではあるが、「直径五十センチもあるうすいかを、ゾウに与えたら食べるだろうか？」小学生たちと討論したことがある。「鼻でたたいて割って食べる……」「大き過ぎるので食べない」「足でふみつぶして、小さく割ったものを鼻で持ち、口に入れて食べる」などと意見が分れた。実際に何頭かのゾウに食べさせて、その様子を一同で見学したのである。

当のゾウは足でつぶして食べたので、予測した意見の合った子は大喜びをした。ところが、別の生まれて間もなくから人に育てられたゾウの場合は、鼻でしばらくかいだり触れただけで食べようとはしなかった。何回かくり返した末、係員がすいかに切れめを入れてやり、中味にふれられ、しかも割り易すいようにして与えた。それでも、鼻で中味をいくらか吸い込んで食べはしたが、丸のまま与えたときのようにそれ以上食べる様子は示さなかった。味を知らないためかと思い、割って与えたら、いかにもうまそうにきれいに全部食べ、もっと欲しいような素振りを見せた。横にもう一個丸のままがあるのに……。

ゾウはわらを好んで食べるが、根元のかたいところを特に喜ぶ。鼻でつかみ、前足ではたくようにして、わらの切口を床に立ててそろえ、口にくわえ、鼻で根元に残っているやわらかい葉をしごきとり、もう一度鼻で持ち変えてかみちぎり、茎の上の方を床に落とす。こんな食べ方をしながら、一晩に二十キログラムものわらを食べている。

すいかを足でつぶして食べたゾウはわらさばきも巧みである。すいかをひとりで食べなかったゾウはわらの食べ方も能率が低い。えさの食べ方一つを見ても、生活の知恵がにじみ出ているようにおもしろい。

飼育係の者は、動物舎の錠を二十個ほど腰にぶら下げている。

動物舎で作業をする場合、直ちに使用できるし、ポケットの中に入れたのではじきにポケットが破れてしまい、紛失する計算が多い。腰にぶら下げているのもっとも能率的だからである。ところが飼育係が歩く段ともなると、錠がちゃらちゃら鳴って極めてリズムカルである。飼育係が来ることは、食事やいっしょに遊んでもらえる、動物にとつて喜ばしい時ばかりとはかぎらない。場合によっては、押え込まれて予防注射をされたり、小さな箱の中に追い込まれて引越しを余儀なくされたりもする。動物も時間があつた程度わかるので、都合の悪いことの起こりそうな時間に飼育係が数人集まって檻の前を通ると、眠っていたものも起き出し、檻に足をかけ背のびをするようなことをする。表情もまた日ごろとは違っている。

錠束の音に動物が敏感なので、えさを与える際、日に数回、多いときには十回にも分けて与え、その都度錠束を鳴らした。強い日照りを好まぬモルモットであるが、錠束の鳴るたびに返事をしながら集まるように条件づけられた。鳴き声は大別して三種類はあるし、歩行の仕方、えさの見つけ方などあわせて知る結果にもなった。どの時間は集まりが悪いとか、何度もしている中に、動物の方の動作がある程度予測できる結果になった。現在ほめすのグループがやっと集まる段階になったばかりでもあり、集まる時間が多くかかるので、団体で来園する園児などに実演して見せる



場合、途中から園児に錠束を鳴らしてもらおうようにしている。通称「モル寄せ」は以前にも増して好評のようである。

動物の行動もある程度予測可能なのと同様に、動物にふれあう子どもの行動も予測可能である。品物等の静物とは異なり、行動する要因は複雑である。人間もさることながら、動物も生命あるものだから、やはり複雑な要因が支配していることは当然である。子どもと動物両者のふれあいともなると、極めて複雑でむずかしい。しかしある程度の予測はやはり可能であるし、そのつもりで対処すればできない相談ではない。

「○○ちゃんは動物に△△しかできないと思う……」このような言葉をよく耳にすることがある。動物とふれあう子どもの行動をさらに分析して、子どもと動物の接点、軌跡いや四次元の世界であるふれあい、その幅を増すよう努力してゆきたいと考えている。子どもと動物のふれあいは、単に教材としての動物では片づけられぬ意義をもっている。自然を畏敬するところから生まれる、人の心のもち方にも及ぶことであろう。生命があり、相手も動く動物なるがゆえに、子どもたちにとってもっとも手近な人間理解の出発点であると思う。その意味で一人でも多くの子どもたちと動物とのふれあいが深められてゆくよう願ってやまない。

(上野動物園)